

天皇睦仁に関する情報——ロシア国立歴史文書館所蔵文書より——

セルゲイ・チエルニャフスキー

日本における革命あるいは変革とも呼ばれる明治維新が始まってから二〇一八年で一五〇年を迎える。日本の歴史において、特筆すべき、かつ、その後の運命を決定づけたこの出来事は、疑いもなく、天皇睦仁と不可分のものである。睦仁は、自らの名により、その明治維新を神聖化したとも言つてよいかもしれない。よく知られているように、この天皇の在位中に日本で行われた広汎な一連の改革は、日出ずる国を世界で最も先進的な国のひとつに変貌させた。

明治維新を客観的に分析し、それに評価を与える権利があるのは、おそらく、日本の研究者のみであろう。従つて、我々はその課題を自らに課すことはせず、本論では、ロシア国立歴史文書館所蔵の文書のうち、天皇睦仁の人格、生涯、活動、そして、その最期に直接関係するものについて言及することのみに留める。

周知のように、ロシアと日本の関係は、ある時期までは十分正常に進展し、深刻な相互の要求と大規模な武力衝突という重荷を負わせられるということとはなかった。状況が決定的に変化したのは、日本において諸改革が行われた後で、一連の改革で面目を一新した日本が実質的に新興国として世界史の表舞台に登場してからである。その刷新は天皇睦仁にその端緒を發する。

ボブリンスキー伯爵家のフォンドには、一九〇四年ロシアと日本間の戦争へと導いた諸原因が分析されている文書が保存されている。その中には、日本における根本的変革が特徴づけられ、天皇の個人的役割が強

調されている。

「一八五六年【ママ】の国家的変動によってミカドはシオグン（このように史料には書かれている。以下、シオグンとする。チエルニャフスキー注）のくびきを我が身から振り落とし、ダイミョウの蜂起を武力で鎮圧し、国の専制的支配者となった【以下、史料中の「ミカド」、「シオウグン」、「ダイミョウ」、「サムライ」はすべて漢字に直す】。

しかし、自己の権力を不動のものとするために、帝は、日本国民に対し、新しい将来の見通しを明らかにし、何世紀にもわたり神聖なものとしていた秩序を根本的に変え、ピョートル大帝と同様に、国内支配の手本と陸海軍改革の師をヨーロッパ諸国に求めることが不可欠であると考えた。

ほとんど独立的存在である領地持ち諸侯たち、すなわち大名たちとその家臣である武士階級、侍たちが不安要因であったことから、日本が偉大になるためには勝利が不可欠であることを彼らに理解させるとともに、扶持を与え、彼らの活動を軍の諸機関の充実に向けさせる必要があった。

：根本的改革に踏み込んでから、帝は、未だ鎮圧できないでいた大名と侍たちに対抗するためには、一般国民に立脚することが不可欠であると確信した。欽定憲法（一八九二年）こそがその構築物の王冠であった。

それと同時に、日本政府、より正確には、天皇は、新しい軍隊の核を構成していた侍たちの武勇心を利用するための口実を探した。そして、島国国家は皆、大陸に確たる足場を築くことを志向するという世界的法

則に基づき(その一例がイギリス、中国と朝鮮に注目することになった。

…戦争(一八九四―一八九五年の日清戦争―チェルニヤフスキー注)

は、再編成された軍隊が、与えられた課題をどれだけ遂行する能力があるかのいわば試金石であった。新しい軍隊はその訓練の勝者となった。

下関条約は、戦費を十二分に補うだけの賠償金とは別に、旅順と関東半島【遼東半島】を得ることにより、日本に、満州に確たる足場を築く可能性を与えた。しかしながら、直ちに、ロシア、ドイツ、フランスが、それらを放棄するよう高圧的な態度に出た。日本はそれを甘受せざるをえず、血でもって獲得した要塞と隣接地域を中国に返すことになった。

このことから、日本は、自国の屈辱の元凶と見なしたロシアに対し、秘められた怨念を抱くこととなった。日本のすべての企図と施策は、日清戦争の不首尾な結果に対し、ロシアに報復することに向けられていた。だが我々はそれを見過ごしたのである…。」⁽¹⁾

以上、長文の引用となったが、その内容は、国の改革における日本の天皇の役割に関する二〇世紀初めのロシア人研究者たちによる評価の認識の一端を示すものである。それと同時に、もちろん、ここで言うほど、そこまでは一義的かつ単純ではなかったとはいえ、日露戦争(一九〇四―一九〇五)の原因を幾らかでも明らかにしてくれる。

にもかかわらず、日露戦争がロシアの敗北に終わり、ロシア側からの領土譲歩という結果をもたらしたことをよそに、両国間の関係は、最高指導者である天皇睦仁とニコライ二世の尽力もあり、早い時期に完全に建設的の性格を帯びることになった。経済的、政治的諸問題に関する協力が再開され、人的交流も円滑化し、かつ、強化された。このことを如実に物語る文書がある。それはロシア国立歴史文書館に保存された文書で、それらの文書には、病床にあった天皇睦仁とその最期、および、後継者嘉仁の即位の時期における両国の相互関係が反映されている。

天皇睦仁が重病の床にあった時、ロシア帝国指導部は、天皇の容態を深く憂慮していたが、このことは隣国との友好関係の維持を真に願っていたことの証明であった。ロシア国立歴史文書館には、それを疑いもなく裏付け、また、ロシア政府、そして、皇帝陛下個人が、日本を包んだ悲しみに深く共感していることを如実に示す文書が残されている。

一九一二年七月二日、在東京ロシア大使館からサンクト・ペテルブルグの外務省宛に、ロシア特命全權大使で第三等侍従官、ニコライ・アンドレエヴィチ・マレフスキー⁽²⁾マレヴィチにより、電報が送られた。それは次のような内容であった。

「外務大臣(日本の―チェルニヤフスキー注)が公文【原語は「ノート」】のかたちで、天皇が重態であることを伝えてきている。帝国政府の名で同情の意を表することを許可されたい。」⁽²⁾

これに対する許可が直に大使のもとに送られ、ロシア政府の名で、ロシア大使館が、同日、天皇に対し、速やかな快復を心から願っていると表明したであろうことは想像に難くない。

しかしながら、すべてから判断して、天皇睦仁の容態は依然として深刻な状態にあり、そのことは大使からペテルブルグに送られた次のような電報の内容から明らかである。

「任務は遂行。天皇の容態は重篤。だが望みなきにもあらず。陛下は一九〇四年から糖尿病を患い、それがネフロゼを引き起し、ここ数日は尿毒症を併発。今日は多少容態が快復。」⁽³⁾

一九一二年七月二八日付の電報でマレフスキー⁽³⁾マレヴィチは次のように伝えている。

「ウチダ(日本外務大臣・内田康哉―チェルニヤフスキー注)は、日本天皇の命令に依り、快復を願う君主としての気持の表明に対する、日本天皇からの謝意を皇帝陛下にお伝えするよう私に頼んだ。天皇陛

下の容態は回復しつつある。⁽⁴⁾

しかしながら、天皇平癒への願いが空しいものであったことは、翌日東京から発信された次のような秘密電報が物語っている。

「日本天皇の状態は絶望。閣僚会議が招集。」⁽⁵⁾

そして、文字通り、この知らせにすぐ続き、ロシア大使からの次のような内容の長文の至急便第六六号がサンクト・ペテルブルグに送られた（以下、一部略）。

「思いがけない日本天皇の死に至るまでの病状と最期は、常ならぬ印象を当地では引き起こした。官報で公表されたところによれば、帝は一九〇四年冬に糖尿病を発症し、それが元で一九〇六年始めには、すでに慢性ネフローゼが進行していた。この病に対して天皇は何ら重大な処置を取らず、何ヶ月も皇居から出ることなく通常の生活を続け、極めて暑い東京の夏を皇居内で過ごした。病床に臥した前日には閣僚会議の集まりにも臨席した【西暦・日本時間七月一五日枢密院会議に臨御、既に異変】。…

しかし七月一五日からは、半睡状態、食欲不振、高熱の症状が現れた。一九日の夕刻には、完全な意識混濁と脱力状態の中、体温は四〇・五度にまで上昇した。宮廷医を手助けするために呼ばれたはずれも【東京帝國】大学教授で高名な内科専門医アオヤマ【青山胤通】と医師ミウラ【やはり帝大教授、三浦謹之助】は、患者に尿毒症の強度の発作が認められるとの診断を下した。同日の夜遅くになって、天皇の病気についての最初の公式診断書が発表されたが、天皇が突然重病になったと、ごく簡単に述べられたに留まった。翌日からは、総理大臣と宮内大臣の合意の下に、天皇の病状に関して、一昼夜に二回診断書が公表され、通常は病室の外には出されないような詳細が伝えられた。二一日の夜中【二一日午後九時頃から二二日夜半過ぎにかけての夜。】『明治天皇紀』第一二巻七

月二二日の項目参照】には天皇の容態に若干の好転が見られ、体温は三七・五度に下がり、呼吸もより楽になり、謔言もなくなった。二二日から二四日まではまだ回復の望みが持たれた。…二五日から二六日にかけて、天皇の状態は目に見えて悪化し、体温は再び三九度に上昇し、心拍は不規則かつ頻脈となり、呼吸も途切れがちになった。

二八日、病床の下に天皇の家族全員が集まり、皇居内の隣接する館に皇族、元老、大臣、将官団が集まった。最期の時が刻一刻と近づいていた。馬車と自動車の列が宮城前広場【*Императорская площадь*】から車寄せ【*подъезд*】に向かって移動していった。車寄せでは、机の上に記帳のための帳簿と紙が並べられていた。帝の強靱な体は、更に一昼夜以上、死と闘った。臨終の時を訪れたのは二九日の午後三時頃であった。…病人の意識はなかった。…三〇日の早朝に出された公式発表によれば、陛下が崩御されたのは三〇日の午前〇時四三分であった【宮内省発表】。

しかし、公式発表が出る前から東京の住民は帝が最期の時を迎えていることを知り、何千人もの人々が宮城前広場【*Императорская площадь перед парадом*】「門前広場」の意。正確には「宮城正門外」【『明治天皇紀』第一二巻七月三〇日の項目参照】に佇んでいたが、天皇が崩御されたとの噂が流れ、人々は泣きながら町に散っていった。新聞の号外の配達人は、鈴を鳴らし響き渡る声で日出ずる国の君主の崩御を触れながら、夜中通りを走り回った。

翌七月三一日に、天皇の遺体の納棺【御舟入りの儀】が執り行われた。それに先立ってしめやかな告別の儀式【拝訣の儀】が行われ、それに参列したのは皇太子と皇太子妃、皇子たちやその妃たち、最上位の高官たちであった。礼拝の際、天皇の遺体は低い日本式の白絹の床に横たえられ、枕元では古式の衣装を纏った女官の一人が故人の顔を扇子で扇いでいた。その後で同じく女官たちが遺体を持ち上げ、杉の木で作ら

れた三重の棺の中に横たえ、皇太后と皇族たちの前で棺が閉じられた。国民の礼拝の場には、棺は置かれないうことになっている。棺は皇居の間のひとつに公式な葬儀まで置かれる。

天皇睦仁の崩御は六〇発の弔砲で、また嘉仁の即位は二一発の祝砲で、それぞれ国民に知らされた。皇居内にも政府関係の建物にも掲揚台は設置されていなかったで、東京では諸外国の大使館と領事館の建物でのみ半旗が七日間掲げられた。⁽⁶⁾

大使館からサンクト・ペテルブルグに送られた至急便第六七号の内容は、日本の現実をよく知っているロシア政権公式代表者たちの天皇政権全体と天皇睦仁に対する深い尊敬の念、日本のために尽力した天皇の活動に対する極めて高い評価を如実に物語っている。

「本年七月三〇日に崩御した日本天皇睦仁は一八五二年一月三日京都に生まれた。彼は孝明天皇の第二皇子で、神武朝一二二代の帝である。幼少時の彼は世俗からは完全に離れた世界で過ごし、王権復古がようやく黎明期を迎えていた頃は京都御所の静謐の中にあつた。孝明天皇は將軍の全権独裁に対してむなしく闘いを試みたが、その努力は実らず、三六歳になる直前に急死した。死因は公式的には水痘【天然痘】とされているが、一節によれば、將軍派から密かに送られた者たちの手にかつたともいう。…一八六〇年に孝明天皇の後継者に指定された睦仁は一八六七年に即位、時に一五歳の若者であつた。その年齢にも似ず、若い天皇は統治者としての優れた資質の持ち主で、不屈の性格、志した目的の追求における不動心、協力者を選び味方につける能力を備えていた。天皇在位のこの早い時期の彼の最も近い友人で助言者であつたのは岩倉公爵と三条公爵で、その後は一貫して大久保と木戸、そして伊藤と山縣（現在は元帥で枢密院議長）であつた。これらの人物の協力の下、短期間で天皇の軍勢に勝利をもたらした闘いが終わった後、独裁体制は倒さ

れ、最後の將軍徳川慶喜（現在東京に隠棲している）は自己の権力を断念し帝に譲つた。…この時期、首都は、京都から東京と改称された江戸に移され、睦仁は徳川の居城に住まうこととなつた。徳川の居城は昔の要塞の姿を今日まで留めており、二列の高い堡塁の間に水を湛えた深い堀が掘られ、石壁の角には三層の高さが数サージェン（一サージェンは二・一三m—チエルニャフスキー注）の中国式の塔があり、鉄張りのどっしりとした木の門がある。石壁の向こう側の大きな古式庭園の程にある平屋建ての木造の館で睦仁は四三年間を過ごした。その間、睦仁はほとんど外に出掛けることはなく、自分の都を離れるのは、毎年行われる秋期大演習と伊勢皇大神宮を訪問する時に過ぎなかつた。ここから彼は、忠実な臣下たちの助力を得て自国民を支配した。彼の在位中の主な歴史的転換点はそれらの臣下たちの名と結びついている。封建制度の撤廃と一八七一年【ママ】の外国人に対する諸港の開放、一八八九年の憲法発布、一八九〇年第一回議會の召集、司法、学校、行政制度の改編、全国鉄道網の建設、商船隊の創設、国家、社会、経済の諸活動の様々な分野の改良等である。一言で言えば、明治期の四五年間で日本は、無知で貧しく内紛と無秩序で疲弊したアジアの二等国から、国民文化の健全な発展基盤、六千万人の労働人口、五億円の予算を持つ一等海軍大国に変貌した。各新聞が故帝を帝國第二の【or 二代目の「bropsim】創始者と呼んでいるのは正当である。【タイムズ「The Times」（英紙）】「ニューヨーク・ワールド」New York World（米紙）】「ル・フィガロ」Le Figaro（仏紙）】「ル・コレスポンダン」Le Correspondant（仏紙）】「ノルド・ドイチェ・アルゲマイネ」ツァイトツング「Norddeutsche Allgemeine Zeitung」（独紙）】「ビルジエヴィア」ヴェドモスチ「Bipkebsie Beromocr」】（露紙）】等、世界各国の新聞が報じている（『明治天皇紀』第一二巻七月三〇日の項目参照）。望月小太郎編訳『世界における明治天皇』（明治

百年叢書 原書房一九七三)では、世界各国の明治天皇崩御に対する記事が集められているが、このうち露紙は在ポーランド紙も含め八紙十種所収されている。】

明治期の間の日本の成長を物語る幾つかの数字を挙げれば、国土面積は八〇%の拡大、人口は二倍に、国家支出は一九倍に、鉄道路線の長さは四〇〇倍に、商船の総トン数は七〇〇〇倍に、貿易額は二〇〇倍に、それぞれ増大した。

崩御した天皇は帝国臣民の間では無限の尊敬と思慕の念を得ていた。彼が神から出自したことを国民の一〇人中九人までが信じていた。一握りの狂信的な無政府主義者による反天皇陰謀が明らかになり暗い影を落としたが、それは彼の治世の晩年に過ぎなかった。⁽⁷⁾

崩御した日本天皇についてのこのような評価づけはまさにその通りである。

指摘しておかなければならないのは、外交至急便というのは非公開の機密的性格を持ったもので、言いかえれば、その内容は第三者によって読まれることを想定したのではない。すなわち、日本指導部たちの目に、ロシア君主および政府に関する良い印象を残すことを狙ったものでもなければ、そのようなことを念頭に置いたものではなかったということである。従って、外交至急便の中で伝えられていることは、ロシア外交団の目から見た客観的なありのままの情報であった。これらのことすべてが意味するのは、ロシア政府の考えによれば、日本天皇は祖国に対する彼の傑出した功績において真の尊敬に値する人物であったということである。

天皇睦仁の崩御後直ちに、日本の新しい統治者である嘉仁天皇への最高権力の委譲が行われた。嘉仁天皇は勅語の中で次のように述べた。

「皇位を継承するに当たり朕は、亡き天皇がお始めになった事を成功

でもって飾るために、先人諸天皇の遺訓と憲法の定めるところに則り、朕の権力を活用することを願っている。朕は、すべての官吏に亡き天皇に仕えたと同様に朕に仕えるよう、また臣民には朕に忠実であるよう命ずる。」

これと同時に、明治の統治は七月三〇日を以て終了とし、七月三一日より天皇の統治に「大正」という名称が与えられるとする詔勅が出された。「大正」は、ロシア語に訳せば、「偉大なる公正」を意味する。⁽⁸⁾

ロシア大使の懇請に基づきロシア皇帝官房により、故睦仁天皇の棺に供えるための銀の花輪が金銀細工職人M・P・オフチニコフに発注された。この花輪は最短期間で作製され、ロシア大使館に発送されたが、このことを記録した文書が当文書館に残されている。

「第一局は、棺に供えるための銀の花輪が、外務省の尽力により、その趣旨に則り、東京に向け送られたことを宮廷財務管理財政部

【Камаральная часть】に謹んで報告する⁽⁹⁾。」
日本全国を包んだ悲しい出来事を受けてロシア宮廷は、「故日本天皇睦仁存命中に確立した慣行に則り」一九二二年八月一八日に新天皇嘉仁誕生の日を祝ったが【各国に天皇親書を以って先帝崩御と（新帝）踐祚が伝えられたのは（西暦・日本時間）八月三〇日】、そのことを示す記録がロシア国立歴史文書館に保存されている。

「…皇帝陛下におかれては、駐劄サンクト・ペテルブルグ日本国大使に皇帝陛下の名で祝いを届けるために儀典官の一人を本日八月一八日に派遣することをご承諾なされた。」⁽¹⁰⁾

ロシア大使マレフスキー＝マレーヴィチの一九二二年八月二二日付至急便第七四号の中では次のように伝えられている。

「本日午前一時天皇嘉仁と皇后節子は大広間で外交団を引見した：
【各国の駐劄外交団の表弔は（西暦・日本時間）九月四日、各国特派大

使の拝礼は同九月一日¹²。

天皇陛下は通常の挨拶の後に私に、自身が受けた重い喪失に際してロシア宮廷およびロシア政府から示された哀悼の意に深く心を打たれたと述べられた。中でも陛下は、皇帝陛下が電報でお伝えになられた弔意は真に貴重なものであった、自身の深い謝意をあらためて皇帝陛下に伝えて欲しいと述べられた。更に陛下は、日露両政府間でかくも良きかたちで確立した友好関係を今後ともロシアと共に支えていくことがご自身の心からの願いであると付け加えられた。：

外交団はその後、大儀典長補伊藤公爵に付き添われて、帝の遺体が安置されている御座所に招かれた。ここでは王座は、白い絹の紐の付いた同じく白い絹織物で覆われた四角の高い天幕で仕切られ、その前面が少しばかり左右に開かれて、天幕の奥、金を施された房付きの天蓋の下に、白い銀色の錦に包まれた棺が台の上に置かれているのが見える。

順番に御座所に入りながら、我々は天幕の入口で立ち止まり、棺に向かって頭を下げた後、御座所の奥へと移動した。そこでは花輪を供える儀式を待ちながら全員が集まっていた⁽¹³⁾。

一九一二年九月一日付の大使からの秘密電報第一七五号には次のことが記されている。

「明治天皇の葬儀は本日夜半に執り行われた【大喪儀は（西暦・日本時間）九月一三日午前九時から一四日午前零時四五分】。遺体を乗せた列車が京都に到着したのは午前三時【大喪列車は、（西暦・日本時間）一四日午前一時四〇分東京・青山假停車場発、京都・桃山假停車場到着が一四日午後五時一〇分】であった。葬儀次第は手順に従ったものであった。棺が宮城から運び出されたまさにその時に、乃木將軍は妻と共に自決した⁽¹⁴⁾。」

同年同月同日付の秘密電報がもう一通残されている。

「帝の葬儀。天皇は父帝崩御に際し貧民の為に百万円を寄付。恩赦令が出された⁽¹⁵⁾。」

当文書館所蔵のファイルの中にロシア大使がペテルブルグに送った報告があり、そこでは新しい日本天皇嘉仁の略歴と、彼についての極めて好意的、かつ、肯定的な人物評価が記されている⁽¹⁶⁾。

睦仁天皇の崩御と彼の後継者である嘉仁天皇の即位の後、日本とロシアの関係は、十分に前向きに発展し続けていったが、それは日本の前の支配者によりその礎が置かれた潜在的可能性に負うところが多かった。

そのことを物語るもののひとつに、日本天皇戴冠式の際にロシア皇帝から日本天皇に贈呈された極めて高価な贈り物に関する文書がある。

帝室宮内大臣V・B・フレデリクス伯爵に宛てた一九一五年九月二二日付の書簡の中で、外務大臣S・D・サゾノフは次のように記している。

「来る九月に日本天皇嘉仁の即位の礼が予定されている。皇帝陛下におかれては、駐東京ロシア大使に対し、戴冠式で陛下の名代を務めるようご依頼なされた。

：我が国で現在確立している日本との事実上の連合関係、および、我が陸軍に対する供与に関して日本政府が示している少なからぬ尽力を考慮するならば、天皇嘉仁に対し、戴冠式の日に向け、皇帝陛下の個人的贈答品を渡すことが望ましいであろう⁽¹⁷⁾。」

これを受けて、高価な花瓶と玉杯数十点からなるリストが作成された。示された目録の中から皇帝は二万ルーブルの最も優雅で高価な品を選んだ。この件に関して帝室宮内大臣V・B・フレデリクスは帝室宮内省官房長官で陸軍中将A・A・モソロフに次のように伝えている。

「日本天皇戴冠式の日贈るものを選ぶために皇帝陛下にご提案した酒杯と花瓶のリストを添付するに当たり、皇帝陛下は薔薇輝石

【open】で出来た玉杯をお選びになったことを貴殿に伝える…。」

(оригинал) Подлинитと同じもので輝石―チェルニャフスキー注⁽¹⁶⁾

書簡に添えられたリストには次のように記されている。

「黒大理石の受け台に載せられた薔薇輝石の玉杯。エカチェリンブルグ研磨工場の製品で二万ルーブル。」⁽¹⁷⁾

同年一〇月ペトログラードから高価なこの贈り物は日本に送られた。

以上述べてきたすべてが、ロシア指導部が、天皇陸仁の人格に対する真の敬意と彼の功績を間違いなく認めていたことを示すものであることを我々は確信する。

〔註〕

- (1) РГИА Ф. 899. Оп. 1. Д. 1007. Л. 1, 2.
- (2) РГИА Ф. 560. О. 28. Д. 463. Л. 108.
- (3) Там же Д. 109.
- (4) Там же Д. 111.
- (5) РГИА Ф. 560. Оп. 28. Д. 463. Л. 113.
- (6) РГИА Ф. 560. Оп. 28. Д. 463. Л. 115, 116.
- (7) РГИА Ф. 560. Оп. 28. Д. 463. Л. 117, 117 об.
- (8) РГИА Ф. 560. Оп. 28. Д. 463. Л. 139 об.
- (9) РГИА Ф. 468. Оп. 8. Д. 1276. Л. 2-5.
- (10) РГИА Ф. 472. Оп. 50. Д. 1689. Л. 2, 3.
- (11) РГИА Ф. 560. Оп. 28. Д. 463. Л. 134, 134 об.
- (12) Там же Д. 138.
- (13) Там же Д. 123.
- (14) Там же Д. 140, 141.
- (15) РГИА Ф. 468. Оп. 44. Д. 1389. Л. 5, 5 об.
- (16) РГИА Ф. 468. Оп. 44. Д. 1389. Л. 7.
- (17) РГИА Ф. 468. Оп. 44. Д. 1389. Л. 8.

(翻訳：有泉和子)